

# 皮膚外用剤の副作用

No.23 (H15.7)

手足の関節痛や打撲によって痛みがあるとき、または皮膚に傷や湿疹などの異常があるときに、湿布薬や軟膏などの皮膚外用剤を使用することがあると思います。一般に皮膚外用剤の副作用は、内服薬に比べて全身的な副作用は少なく、接触皮膚炎のような局所の副作用や過敏症が報告されることがほとんどです。

接触皮膚炎とは、原因となる物質が皮膚に接触したことにより生じる皮膚炎のことで、一次刺激性接触皮膚炎とアレルギー性接触皮膚炎に大別されます。

一次刺激性接触皮膚炎は、過剰の薬剤を使用した場合、あるいは傷や湿疹などの障害があるバリア機能の弱い皮膚に塗布した場合などに、薬剤の過剰吸収が起こることで表皮細胞が傷害されることにより起こります。症状としては痛みや痒みを伴う発疹・発赤や浮腫、水疱などがみられます。

アレルギー性接触皮膚炎は塗布された薬剤が皮膚から吸収された際に、その成分を異物であると体が認識することで免疫炎症反応を示すことにより起こります。症状は一次刺激性接触皮膚炎同様、痒みを伴う発疹・発赤や浮腫、水疱などですが、まれに全身に拡大することがある点で異なります。

なかでも注目したいのが、光接触皮膚炎と呼ばれる、光を浴びることによって皮膚炎が起こるタイプの接触皮膚炎です。このタイプでは皮膚に接触したある薬剤に、太陽光線中の紫外線が照射されることにより皮膚炎が生じます。症状は通常の接触皮膚炎と同様ですが、他と比較して痒みが強く現れることが多いようです。

また、症状が治まった後でも、強い紫外線にあたると症状が悪化したり、ぶり返したりすることがあるので注意が必要です。

特に消炎鎮痛薬（ケトプロフェン含有）のはり薬や塗り薬を使用しているときは、注意が必要です。

ただし、薬剤性の光接触皮膚炎は、通常の皮膚炎とは異なり、薬剤を

塗布した部位に光があたらなければ皮膚炎は起こりません。そのため外用薬を使用した部分を濃い色の衣服やサポーターなどで覆うことによって、簡単に予防することが出来ます。

皮膚外用剤を使用する際に注意したいのは、処方医によって定められた用法・用量を守り、過度の多用・連用を避けて正しく使用すること、

またアレルギーがあれば予め医師に告げておくことです。その上で、発疹や湿疹、皮膚変色等の異常を認めた際には、早目に皮膚科を受診して適切な処置を受けて下さい。

#### 【アレルギー性接触皮膚炎の原因】

原因	例
局所用剤中の成分	
抗生物質	ペニシリン、スルホンアミド、ネオマイシン
抗ヒスタミン薬	ジフェンヒドラミン、プロメタジン
麻酔薬	ベンゾカイン
消毒薬	チメロサール、ヘキサクロロフェン
植物	ウルシ類；ブタクサ；サクラソウ
金属化合物	ニッケル、クロム酸塩、水銀
染料	p-フェニレンジアミンなど
化粧品	脱毛薬、マニキュア液、脱臭薬
工業用薬品	アクリル酸モノマー、エポキシ化合物、
大気中の物質	ブタクサ花粉、殺虫剤スプレー